

モンスーンの吹く街

〔一台湾の気候と暮らし〕

茨城県立土浦第一高等学校 松本 穂高



写真1 台湾北東部の海沿いの街（瑞芳鎮の九份, 2019年）
海からの風がいつも吹く。斜面の上方は強風となり、樹木が育たず笹原となっている。



図1 台湾の周辺地図（二宮書店地図帳紙面を改変）



モンスーンがいつも吹く街がある。時に強く吹き、斜面の草木を^{はふく}匍匐させる（写真1）。季節によって風向きが変わるモンスーンに、一年を通して吹かれるのはなぜか。その街はどこにあるのか。

1. モンスーンが吹く街の地形と気候

一年を通して季節風が吹く街は、台湾の北東部にある。台湾は、広さが九州とほぼ同じで、地形も九州と同じく山がちである（図1）。南北に台湾山脈が走り、その最高峰のユイ（玉）山は標高が4,000 m近くある。富士山より高く、北回帰線が通る位置にありながら、冬には積雪をみる。

このような高い山脈は、プレートの沈み込みによる地殻変動でできた。フィリピン海プレートが西に向かって移動するのにともない、琉球弧とフィリピン弧ができた。この二つの弧状列島の会合点に、台湾が位置する。つまり、台湾島の北東部は日本の南西諸島につながり、台湾島の南部はバシー海峡を経てフィリピン諸島につながる。台湾島の西岸部は、北が沖縄トラフに、南が南シナ海盆につながるため、どちらも沈降する地帯となり、南北に連なる広い平野ができている。沈降する関東平野中央部が、河川の沖積作用で広くなったのと同じ成因といえる。

この台湾山脈のなかに、その街はある。夏は南東からの季節風が湿った気流をもたらす。冬は北東からの季節風が吹き付け、暖かい海水で水分を含んだ気流が雨をもたらす。夏に南東風になるのは、インド北西部に中心をもつ「モンスーン低気圧」に向かって風が吹くためである。一方、冬に

北東風になるのは、大陸に発達したシベリア高気圧からの吹き出しのためである。こうして台湾山脈の東斜面には一年を通して東寄りの風が吹き付け、雨がよく降る。この雨の多い地域で、人々はどのような暮らしを営んでいるのか。

2. 雨の多い街での暮らし

九份（ジョウフン）は週に8日、雨が降る。こう例えられるほど、雨が多い。台湾北東部にある九份は、かつて金鉱山で栄えたが、閉山後は寒村に戻った。その後、映画の舞台となったことで、再び賑わう街となった。

斜面に沿う細い道には、所狭しと観光客相手の店が軒を連ねる。その路地には屋根が設けられ、雨の多さを感じられる（写真2）。近隣の十分（シーフェン）は、平溪天燈節の祭りで提灯を一齐に飛ばす光景で有名だが、この提灯飛ばしは、観光客がいつでも体験できる（写真3）。提灯を飛ばすのは単線の線路の軌道内で、その線路のすれすれまで家屋が張り出す様子とともに、山中での平地の少なさが感じられる。平地の少ない平溪（ピンシー）溪谷に線路が引かれたのも、もとは石炭の積み出しのためだった。

この鉱山鉄道は、日本統治時代に開通した。つまり、鉱山開発や鉄道建設を担ったのは、日本の会社である。このように、台湾と日本とのつながりは深い。



写真2 アーケードの通り（九份，2019 年）
商店街には屋根があり，雨が多いことがわかる。



写真5 海岸の奇岩キノコ岩（野柳地質公園，2019 年）
隆起や海食でケスタ地形や奇岩が現れた。この公園は，日本の伊豆半島や下北ジオパークと友好関係を結んでいる。



写真3 天燈飛ばし（平溪溪谷の十分，2019 年）
大きな提灯に願いごとを書いて飛ばす。線路に家屋が迫り，平地が少ないことがわかる。



写真6 高雄の街なか（高雄市，2019 年）
季節を問わず，1 日に何度も雨に見舞われる。街行く人に傘は必需品である。



写真4 台湾高速鉄道（台北市，2019 年）
日本とヨーロッパの技術が混在したシステムだが，車両は日本の新幹線がほぼそのまま使われている。

3. 台湾と日本のつながり

1895 年の清との間で結ばれた下関条約により，日本へ割譲された台湾。1945 年の終戦まで日本の植民地経営が進められた。そのことについては批判的に捉えられる一方で，産業や教育の発展など，社会経済の成長をもたらした面もある。2017 年現在，台湾にとっての海外渡航先で日本は中国本土に次いで 2 位であり，親日の国民性が表れている。また日本にとっても海外旅行先の 4 位が台湾となっている。

台湾と日本との親密な関係は，観光だけではない。環太平洋造山帯に位置する両国・地域にとって，地震や火山が多いことも共通する。地震国の日本で安全性が確立している新幹線は，車両がほぼそのまま台湾に導入された（**写真4**）。台湾高速鉄道は，台北と高雄を 1 時間半あまりで結び，その高頻度定時性と速達性は日本の新幹線に比肩する。

アウトドア活動が盛んなことも，日本と共通する。火山地帯は，箱根のように観光開発され，行楽客で賑わう。奇岩の海岸は地質公園に指定され，日本の複数のジオパークと友好関係を結んでいる（**写真5**）。

NIEs の一角という側面も，現代の台湾を見る上で欠かせない。一人あたり GDP は上昇を続け，2000 年には 14,844 ドルだったが，2019 年には 25,873 ドルとなっている。第二の都市である高雄は，広い後背地と海に臨む地の利があり，台湾で最大の工業地帯となった。高雄港はかつて世界最大のコンテナ積み出し量を誇ったこともあり，現在でも世界屈指の取扱量がある。

この高雄でも雨が多い（**写真6**）。これは，モンスーンの影響で対流性の降雨があるためである。このように，モンスーンの影響は北部から南部まで全島に及ぶ。つまり台湾全体が，モンスーンの吹く島といえよう。